

はなの村だより・別冊

津野先生の提言

花の村では現在水稲布マルチ直

播栽培普及のためのパンフレット
を作成準備中ですが、布マルチ稲作
の考案者でもあり、花の村の理論的
指導者でもある津野幸人先生にそ
のパンフレットの巻頭言のご執筆
をお願いいたしました。

「豊かな生態系を子孫に遺そう」は
我々の生き方や今後の有機農業の
あり方について、経済成長万能とす
る現代の風潮に対し、警鐘を鳴らす
ものです。我々の「花の村活動」の
今後の指針ともなるべきものです。
津野先生のご了解を得て、花の村だ
よりの別冊として送らせていただ
きますのでどうぞお目通しくださ
い。

(藤本 記)

豊かな生態系を

子孫に遺そう

津野 幸人

○ はじめに

私は、有機農業を1人でも多くの
方にやって頂いて、豊かな生態系を
子孫に残そうと呼びかけている者
です。稲作についての履歴を初めに
自己紹介しておきます。若い頃はイ
ネの多収穫を研究しました。この本
は中国語に翻訳されて、たくさん
読者を得ました。そのおかげで中
国の各地で講演もしました。65歳で
大学を退職すると、アメリカのアー
カンソー州、カリフォルニア州の稲
作組合から、栽培アドバイザーの依
頼を受けて、大型稲作への助言も行
ってきました。

アメリカ稲作の実態を知るにつ

れて、ここと競争すればわが国は必
ず負ける、と確信しました。その理
由は、①水田区画が広いために、機
械の運用効率に格差がありすぎる。
そして、②常に農産物輸出を意識し
てコスト計算をしている。③農業者
の職業倫理が高い。④農薬の取り扱
いが慎重で、環境問題への意識が高
い。

このような実態に触れるにつれ
て、わが国は規模拡大路線とは別の
道を進まなければならないと痛感
しました。この小文では主に③、④
の問題と歩むべき「別の道」につい
て述べたいと存じます。

○ 安全な食品とは何か

スーパーマーケットの食品売り
場には国産○○使用と添え書きし
たパンや納豆が売られています。こ
れは、外国農産よりもわが国のもの
が農薬使用の面で安全だ、との消費
者の誤解を利用してるとしか私
には思えません。アメリカ、ヨーロ
ッパの残留農薬基準は、わが国より
も遙かに低く設定しています。アメ
リカ稲作では、農薬散布は通常2回

です。日本は10回以上です。ナシ
やリンゴの生産で40〜50回も
農薬散布をするのは日本だけです。
日本緑茶は残留農薬が怖くて、私は
飲みません。

このようにわが国農産物の危険
性を述べますと、決まって出てくる
反論は、「それでも日本人の平均寿
命は世界最高水準ではないか」と言
った類です。農薬毒性を人体実験で
証明することは、人道上許されませ
ん。その毒性は、動物実験からの推
定値です。根本問題は、農薬は生命
現象を破壊する物質である。人間は
微生物や昆虫よりも体重が重いか
ら目に見えた被害がでないのです。
だが、妊娠中の胎児を考えて下さい。
殺虫剤には神経系の伝達機能を阻
害するものが多いのです。小さな命
を神経毒に晒すという愚行は避け
ましょう。

もう一つの根本的な問題は、農薬
を浴びた微生物や昆虫の抵抗力が
増えてきているという事実です。こ
れは、近年における農薬散布回数
の激増が、我々に生態系の危機につ